

自伝文学の世界

佐伯彰一編

朝日出版社

自伝文学の世界

昭和五十八年十一月二十日 初版発行

定価 七〇〇〇円

編者 佐伯彰一

発行者 原雅久

整版所 住友出版印刷株式会社

印刷所 誠文社印刷所

製本所 東和製本

発行所 株式会社 朝日出版社

一〇一 東京都千代田区西神田三ノ三ノ五
電話 東京(〇三)二六三一三三二一(代)
振替口座 東京 四一四六〇〇八

© 一九八三

ほんの十数年前まで、自伝論、自伝研究というのは、全く日の当たらぬ場所に近かった。いま、このいかにも多彩豊富な大冊の論文集を世に送り出そうとして、つよい感慨に打たれざるを得ないのである。

自伝論の不在もしくは不振というのは、ごく控え目についても、まことに奇妙な事態であった。というのは、自伝そのものは、改めて言い立てるまでもなく、洋の東西を問わず、しごく由緒正しい、古くして伝統的なジャンルであった。西にヨセフスの『自伝』やアウグスチヌスの『告白』があれば、東にも司馬遷の「大史公自序」があり、わが平安朝の女流日記があった。「自伝」という呼び名が定着したのは、十九世紀のヨーロッパにおいてであったにせよ、自伝的ジャンルの淵源と系譜は、ほとんど悠遠というに近かった。しかも、自伝論、自伝研究は、不思議なほど生まれることが遅かったのである。

それが何故かという問題に、いま直ちに立ち入ろうとは思わない。人間がみずからの生涯をふり返りつつ語るという作業が、あまりに自然、日常的なことに見えたせいであったかも知れないし、歴史として受けとるにはあまりに狭く、私的であり、といって文学と見なすには、あまりに即事実的で、想像力の働く余地が乏しいと判定されたせいかも知れない。読むに耐え、後世に伝えるに足る自伝の数が、東西において次第にふえ、積み重ねられて来たにもかかわらず、自伝ジャンルのいわば正統認知は、奇怪なほど果たされることが手間どったのである。

ようやくこうした事態に変化の兆が見え出したのは、ここ十数年来の話にすぎない。編者自身ふり返ってみても、始めて自伝論エッセイをさる雑誌に連載しようとしたのが、ほぼ十年前の話であるが、その際、先行の参考書はと見廻してみても、その乏しさに驚かざるを得なかった。古く、ほんの散発的に出た研究書の大方が、すでに絶版となり、

忘れ去られた本となって、入手もままならぬという条件も働いたとはいえ、その時読むことが出来たものは、ほんの三、四冊、それも十七世紀の英米の清教徒たちによる告白自伝を中心とする特殊研究にすぎなかった。もちろん、ドイツに Georg Misch という学者がいて、一九〇七年以来、嘗々として自伝研究にいそしみ、すでに歴大な業績を生み出しているという事実は承知しており、その古代篇二巻の英訳（一九五〇刊）と、七〇年初頭のハワイ大学図書館でめぐり会うことが出来た。ミッシェの徹底した精査ぶり、古代の淵源から出発して、一步一步足もとを踏み固め、みだりに飛躍を試みないというドイツ学者らしい着実さは、まことに讃嘆に値するけれども、総体としてやはり孤立した仕事と認めざるを得ないことは、その英訳や紹介が、五〇年以後全く途絶えていた点にも察せられる。

ところが、七〇年前後から、アメリカとフランス、とくに前者で、ほとんど急激に、自伝研究の刊行が目立ちはじめた。六〇年代後半以来のアメリカで、女性自伝、またいわゆる少数民族系の書き手による自伝の数がにわかにはふえてきたという条件も、一役買ったのかも知れない。また、ベトナムの失敗がもたらした反省・自己検討のムードも働いたのかも知れない。ともあれ、自伝論の新刊が続々と現われて、編者を喜ばせ、うろたえさせさえるという新事態の到来であった。これは、一九八〇年の話だが、ある自伝研究書の「序文」を読んでいると、「かりに五年前であったら、必ずやこの重要な分野が学界で無視されていることを嘆く言葉で、序文を書き出していたに違いない。しかし、幸いにも、現状では流行のテーマとまではいわずとも、立派に確立された領域となっており、云々」という箇所に行き当たって、苦笑せざるを得なかった。アメリカの大学では、自伝論のコースを設けた所が多いと教えてくれた人もあり、げんにその種のコース向けのテキストとおぼしいアンソロジーの類も、かなり目につく現状である。

編者としては、まことにうれしい待望の事態の到来というべき所であるが、ここに日本人研究者として見逃し難いポイントがある。というのは、アメリカの、そしてまたフランスやイギリスの自伝論において、その対象も関心の範囲もほぼ完全にいわばヨーロッパ文化圏、欧米諸国の作者、作品に限られている。いや、それどころか、自伝ジャンルは、そもそもヨーロッパの知的、文化的特産物に他ならぬという大前提が、いまだに罷り通っている。ヨーロッパ

人の自意識が生み出し、育ててきたジャンルと信じこんで、つゆ疑いを示さない論者が、大半を占めているのだ。

その意味でも、この論文集刊行の意義は、画期的なものがあると、手前味噌をこめて、編者として言っておきたい。日本の自伝的系譜ばかりでなく、中国や韓国などアジアの自伝の実例をとり上げ、さらに欧米系の自伝についても、すこぶる幅広い視野を提供している。こうした論文集は、これまで世界のどの国でも、いまだ刊行された例がないのだ。実のところ、本書は、編者の還暦記念のため、知友、同僚、後輩たちが、こぞって快く寄稿して下さったものの集大成であるが、そうした友情の暖かさに心からの感謝をささげると同時に、書物としてのユニークさ、学問的、批評的な意義深さ、新鮮さを言わずにいられない。

一九八三年十月

編者

目次

まえがき	佐伯彰一	i	
自伝ジャンル・東と西	佐伯彰一	3	
第一部 自伝を読む			
自伝の特質とその範囲	エドワード・サイデンステッカー	大澤吉博訳	27
——朝の日記文学を中心として——			
白石と諭吉	平川祐弘	47	
——刀に対する態度をめぐって——			
「先祖のしな」への立ちかえり	ジョン・ポチャラリ	62	
——本居宣長の『家のむかし物語』——			
自伝の〈時〉	小宮彰	74	
——新井白石『折たく柴の記』における〈時〉の表現をめぐって			
三島由紀夫における「自傳」の構造	和田正美	87	
——『太陽と鐵』、『私の遍歴時代』をめぐって——			

真摯なる賈の告白者……………	小川 敏 栄	99
——ヴェルレーヌの『告白』——		
語りへの回帰……………	井 上 健	113
——ガートルード・スタイン『アリス・B・トクラスの自伝』について——		
“A Sketch of the Past”における		
“Being”と“Non-being”の意味……………	満谷マーガレット	126
——ヴァージニア・ウルフの自伝的エッセー——		
生きる情熱と真実への欲求……………	増 田 裕 美 子	140
——ポーヴォワールの『娘時代』——		
夢の中の私、夢を見つめる私……………	内 藤 高	151
——イヨネスコ『日記断片』——		
再生する樹木……………	弥 永 徒 史 子	164
——オディロン・ルドン「芸術家の打ち明け話」——		
舞台を下りた喜劇人……………	星 埜 史 子	178
——チャップリンと渋谷天外の自伝——		
映画の揺籃期と映画監督の幼年期……………	四方田 犬 彦	191
——マキノ雅弘とジャン・ルノワール——		
語るべきへ自己△とは何か……………	大 澤 吉 博	204
——ガンディー『自叙伝』——		

時代に裏切られた語り部……………	上垣外 憲 一	216
——『石光真清の手記』——		
二つの祖国の間に立った「自我」……………	金 泰 俊	231
——李方子の自伝『すぎた歲月』——		
韓日間の軋轢を生きて……………	崔 博 光	247
——金素雲『天の涯に生くるとも』——		
批准と代償……………	菅 原 克 也	259
——Yung Wing: <i>My life in China and America</i> ——		
自伝に見る日米二重文化人……………	太 田 雄 三	272
——Joseph Heco, <i>The Narrative of a Japanese</i> を中心に——		
自伝を書けなかったヴォルテル……………	大 嶋 仁	284
——異文化体験の告白——		
十七世紀における「死の家」……………	長 谷 川 信	295
——「司祭長アヴァクムの自伝」について——		
十九世紀ロシアの知的風景……………	土 谷 直 人	308
——自伝・回想にみる一八三〇年代のモスクワ大学——		
生存の条件としての記憶……………	入 江 隆 則	319
——ナボコフの自伝にふれて——		

馬に乗った少年 大井 浩二 329

——『リンカン・ステフェンズ自伝』のアメリカ性——

書簡より見たメレディス 富士川 和男 341

自伝に見る一九三〇年代 橋 口 稔 356

——スペンダーとイシャウッド——

第二部 自伝と文学

現代アメリカの一茶たち 上 田 真 369

——最近の英語俳句における自伝的傾向——

T・ウィリアムズ、人と作品の間 長 田 光展 390

——六〇年代の作品をめぐって——

《物語》への昇華 藤 平 育子 398

——フォークナーの自伝的エッセイ「ミッシンパー」——

スタンダールの『十二夜』(Twelfth Night) 市 川 裕見子 411

——劇作に見られる自伝的要素——

宇野浩二の小説と私語り 鈴 木 登美 423

川端文学における自伝的要素 鶴 田 欣也 437

——「十六歳の日記」の構造——

泉鏡花における自伝的要素……………笠原伸夫 457

* * *

佐伯さんのこと——わが芸道の師……………小松伸六 469

佐伯彰一と私……………奥野健男 473

佐伯さんとの歴史……………小島信夫 479

大学人と実作者……………三浦朱門 486

思い出すままに……………村松剛 489

創作合評のこと……………上田三四二 495

佐伯彰一君と私……………中川努 500

都立大学時代の佐伯先生……………出山桂吉 505

佐伯先生と私……………黒田則子 509

送る言葉……………平川祐弘 514

書斎のあるじ——作文の種……………佐伯和子 517

* * *

佐伯彰一先生略歴	520
佐伯彰一先生著作年譜	521
執筆者一覧	524
あとがき	526

自伝文学の世界

自伝ジャンル・東と西

1

佐伯彰一

インドの聖なる指導者ガンディー（一八六九—一九四八）の『自伝』の序文に、次のような一節のあるのを、ご存じだろうか。ガンディーが自伝を書き始めたことを聞きつけた「神を恐れるわが友」が、ある日訪ねて来て、こう詰問したという。「一体何故こんなことをやり出したのですか。自伝を書くなんていうのは、西洋独特の習わしですよ。私の知る限り、東洋で、そんなものを書いた人間はひとりもおりません、西洋の影響を受けた連中は別ですが」と。

この「神を恐れるわが友」は、さらに言葉をつづけて、政治的指導者という立場からしても、「自伝」は困りものだ。「今日、あなたが指導原理として書き記したものを、いつか変更されることになる、あなたに従って行動してきた人間は、一体どうなりますか」と迫った由であるが、この部分は、この際の多くの論点には直接かわりがない。

しかし、前半の論難には、東洋人、アジア人の自伝愛読者として聞きのがし難いものがふくまれている。自伝ジャンルはもともと「西洋独特の習わし」であるのか。もっぱら西洋人が生み出し、育て上げてきたジャンルで、東洋には異質の渡来物、移植品と見なすべきものなのか。アジア人による自伝とは、何よりも西洋化した連中による模倣的な産物にすぎないのか？

こうまで言い切ってみると、ガンディーの「神を恐れるわが友」の忠告と意見は、いかにも矯激すぎる一面論とひびくだろう。アンチ西洋でこり固った国粹主義者、伝統主義者の、いわれない言い掛りと受けとられかねない。たしかに、乱暴すぎる断定をふくんではいろのだが、実のところ、彼の一刀両断の否定論にも、大いに聞くべき所があるのだ。少なくとも、ただの政治運動家、またアジア主義の狂信家の世迷い言として斥けるわけには参らない。というのは、このガンディー『自伝』そのものについて西洋化、近代化の所産という一面は否み難い。彼が教育を受け、弁護士資格を得たのは、イギリスにおいてであり、彼の教養の中には、近代イギリスが消し難く入りこんでいた。彼の一貫した反植民主義闘争を支えてきた基本理念は、なるほど土着的、伝統的なものであったが、こうした自国の思想伝統への目ざめ自体が、いち早く青年期に西洋に身をさらした体験による所が多かつただろう。ガンディーの『自伝』執筆の目的、また動因は、「神を恐れるわが友」の詰問に答えて、彼の明らかにしているように、「真理についてのかずかずの実験」のあとを記しとめることにあり、彼独特の発想にもとづくものに違いなかった。いわば、思想実験の率直な記録としての自伝である。その際、自分の書こうとするものは、「本物の自伝とは違う」とつけ加えてもいた。しかし、こうした断わり書き自体、ガンディーの意識と知識のなかに、西洋流の「本物の自伝」のイメージが息づいていたことを裏切り示すものではなかったか。そして、アウグスチヌスの『告白』といった古典的な先例を筆頭に、J・S・ミルの『自伝』や、J・H・ニューマン枢機卿の『アポロギア』、さらにはソローの『ウォルデン』など、こうした思想実験型の自伝は、西洋に少なくない。いや、むしろ、正統的な系譜の一つをなしてきたものと認めなくてはなるまい。

ガンディーの後継者、インド統一の推進者としてひろく知られたネール(一八八九—一九六四)にも、長大な『自伝』がある。独立運動のために逮捕、投獄された際に物された獄中記という因縁も面白いが、インドの名門家庭に生まれた彼の場合は、学校教育も、パブリック・スクールのハロー校からケンブリッジへと、イギリスのエリートなみの表街道をふんでおり、格調ある見事すぎるほどの英語で一貫している。ネールの場合、自伝執筆におけるいわば目

的意識は、ガンディーに比べてもより一層明確とすらいえるもので、第一の目的は、長い獄中生活の孤独に耐えぬくために、何か専念できる明確な作業を、ということだったといひ、同時に自分のかかわって来た過去の政治的事件をふりかえって、これにはっきりした見通しをつけたかったためと「序文」で書いていた。そこで、作中の記述が、時に事件の羅列となつて近代インドの「史的概観」のごとく見えるとしても、視点は「まったく一面的なもので、自己中心的たるざるを得ない」と言い切るのだ。爽快ともいいたいほど、ふっきれて明晰な自意識であり、筆致であつた。西洋型の自伝との血縁は、ネールの場合、あまりにも判然としてゐる、と認むべきであらう。

これには、そもそも「近代化」なるものが、ヨーロッパ主導のものであり、いわゆる Westernization とほぼ重なり合わざるを得なかつたという事情が働いていたことは、もちろんである。インドのように、近代化の運動が、まず反西洋、反植民地化の闘争という形をとつた場合ですら、自治、民族の独立といった目標そのものが、西洋近代の生み出したナショナリズムとわかち難く結びついてゐた。いわば西洋近代の正統の申し子たちが、近代のもたらす毒や悪弊に対して叛旗をひるがえしたという趣きであつた。

こうした事情と実例は、なにもインドと限らない。しかも、そうした非ヨーロッパ地域における近代化の先駆者、リーダーたちの実に多くが、それぞれの「自伝」を書き残してゐるのだ。たとえばマレー半島には、『アブドゥッラー物語』（一八四九）があり、中国には容閩の『西学東漸記』（一九〇九）があつた。アブドゥッラーは、いち早く英語をマスターしたことから、イギリスのあの辣腕の植民地開拓者、ラッフルズ卿の通訳、秘書として協力するめぐり合せになつた人物であるが、マレー語による自伝や旅行記を書きのこして、近代マレー文学の突破口を切りひらいた存在と認められてゐる。一面では、マレーの植民地化を促進する片棒役をかつぐという皮肉な結果にもなつたが、身近なイギリス人たちの接触、近代化の現場にいち早く居合せたという体験が、母国語使用による自己表現という、まさしく近代的な第一歩へと、彼をうながし、駆り立てたのであつた。また、中国人の容閩は、マカオの近郊で生まれ、アメリカ人経営のミッション・スクールに通つて、英語を身につけたことから、いち早くアメリカ留学の機会を